

---

A collection of short stories

るうあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A c c o l l e c t i o n o f s h o r t s t o r i e s

### 【Nコード】

N 1 2 7 1 Z

### 【作者名】

るつあ

### 【あらすじ】

こちらの短編小説は創作企画【みんなで100題】に投稿したものです。各一話ごとの読み切りですが、中には連作となっているものもあります。平凡な日常の恋物語。一部恋話メインでないものもふくまれています。

【注】R15の記載はごく一部の話だけとなっています。

## 輝石

夜の街を白く染め上げるように降っていた雪も今は止み、すでに融けはじめ、消えていこうとしている。

わたしは独り、少し足早になって目的地へと急ぐ。

誰と約束しているわけでもない。……わたしだけを待っていてくれるわけでもない。

けれど、そこは暖かくわたしを迎え入れてくれるだろう。

そう……、今夜も変わらずに。

\* \* \*

馴染みのバーで、一人グラスを傾けていると、カウンターの向こう、バーテンダーの彼が意味深な笑顔を向けてきた。モスコミューールを半分以上空け、次は何を飲もうかと考え始めた頃だった。

「何か良いことでもありましたか？」

いつも丁寧な口調で、気さくな笑顔を向けてくれるバーテンダーの彼、三井倉理みつぐらさんともすっかり顔なじみになっている。

彼の年齢は知らないけれど、わたしとそんなには変わらないだろう。三十はいつてないように思うけれど、穏やかで落ち着いた雰囲気を持っていて、ひどく年齢差を感じさせる時もある。職業柄かもしれない。

「どうして？ そんな風に見えますか、わたし」

訊き返すと、彼は「いえ、なんとなく」と曖昧に答え、わたしの手元を気にしているようでもあったけれど、先はぼかした。

良いことでもありませんでしたかと問われても、別段「良いこと」はなかった……ように思う。とくにこれといって思い浮かばない。もちろん悪いこともなくて、今日は一日、いつもと何ら変わりのない平々

凡々とした日だった。

そもそも、わたしという人間自体が平凡なのだ。外見的にも十人並み。これといった特徴もない。髪は肩甲骨にかかるかかからないかという長さで、出勤時はたいていシュシュで一つにまとめているか、バレッタで留めているかしている。もともと地味な顔立ちの上、そうして髪を一つにまとめているとさらに地味さが増して、他人にまで「老けてみえちゃわない？」と指摘される始末だ。だからといって、流行りのメイクやファッションで身を包むのは、どうも好きじゃない。というより、似合わないだろう。

日々の生活も、大きなトラブルなんてほぼ皆無と言ってよく、地味で平凡そのもの。波乱万丈でドラマチックな人生に憧れなくもないけれど、やっぱり平穩が一番だと思ってる。二十数年かけて培われてきた凡庸な性格は今更もうなおしようにがなく、そうした性格に合った面白みのない人生をこれからも歩んでいくんだらうなと思ってる。諦念というより、臆しているのかも。

変化を望む気持ちより変化を怖れる気持ちの方が年齢を重ねる毎に強くなるようだ。

そして今日も、だ…

ため息をつく、不意に彼と目があつた。

彼はわたしの前に「フローズン・ダイキリ」をそつと置く。

「雪はもうやんだようですね」

「ええ。積もらなくてよかったような残念なような」

わたしは小さく笑って、彼が作ってくれたダイキリを手元に寄せた。

シャンパングラスにクラッシュドアイスを盛ったフローズン・ダイキリを味わうのは久しぶりだ。

「おいしい」

「ありがとうございます」

「あ、良いことあつたわ。今、こうしてとびきりおいしいカクテルをいただけ」

「それは……、嬉しいことを言ってくれますね、晶枝さん」あきえ

「お世辞じゃないですよ？ 本当においしいからこうして頻々と来てるんです」

「ええ」

彼の涼やかな目元がやわらいだ。

営業スマイルというものなんだろうけど、それがとても自然で、嫌味がない。

当たりの柔らかい笑顔と話し方。それは彼の作ってくれるカクテルのように、すんなりと受け入れられる。そして心を落ち着かせ、一方で程良い熱も与えてくれる。

カウンターの外にいる三井倉さんはどんなだろうと、時々思う。想像がつかない。

この店でしか会ったことがなく、しかも時間は夜。控えめな照明の下でしか、彼の笑顔を見たことがない。

想像がつかないのだった。だから、なおさら知りたくなる。彼と二人で話すようになって、一年近くが経つ。

話の内容は他愛ないものばかりだ。わたしが彼に質問をすることが多い。それぞれのカクテルの名の由来やレシピ、それに料理の話もする。料理の話は、わたしもそれなりに好きで色々作ったりもするから、お互いの得意メニューのレシピを教え合ったりもした。それから日常で起こったささやかな笑い話や、たまには愚痴めいたことも吐露したりする。

けれど、わたしも彼も、個人情報それはそれほど打ち明けない。

だからわたしは、バーテンダーの「三井倉理さん」しか知らない。彼もまたわたしのことは、常連客の一人としてしか認識していないだろう。名前と顔が一致し、好きなカクテルを憶えているという程度だろう。バーテンダーとして、常連客の嗜好を憶えるのも仕事の一つだろうから。

二月半ば、まだまだ寒い日が続いて、今日だけではなく先週も雪の降った日があった。

先週とは違い、今日の雪は短時間でやんでしまった。積もったら積もったで困ることが多いから文句も出してしまうのだけど、やはり雪は好きだ。

そして好きといえば、この店のカクテル。もちろん店の雰囲気自体も好きで、月に何度か…さすがに週一とはいかないけれど…大抵は一人で来る。女友達を連れてきたこともあるけれど、恋人は、ない。

バーテンダーの彼に目をやると、彼は別の客のためにカクテルを作っていた。

グレイプフルーツジュースをつかった「スプモーニ」と、ブランドーベースの「サイドカー」は、わたしの後方のテーブル席にしているカクテルの注文だったようだ。和やかに談笑している。

他にも客はいるけれど、二人、ないしは四人でテーブルを囲んでいて、カウンター席には、わたしだけが座っている。こんな贅沢なことはめったにない。

いつもカウンターの席に座るのだけど、大抵は先客がいて、カウンター席を一人占めできたのは、今夜が初めてかもしれない。

わたしは彼に作ってもらったカクテルと、落ち着いた店の雰囲気、そして彼が「特別サービスです」と悪戯っぽく笑って差し出してくれたつまみ…ラムのきいた生チョコを堪能していた。

ラムを使ったカクテル「ダイキリ」は、ドライジンをベースにしたカクテル「ホワイト・レディー」に次いでわたしの気に入りのカクテルだ。

わりあい簡単に作れるカクテルなのだけど、簡単なだけに、おいしく作ってくれる店はけっこう稀…だと思っ。

その貴重なお店が、今わたしがいる店。おいしいカクテルを提供してくれるバーテンダーのいる店。

それがここ、知人に紹介してもらったカクテルバー「Mimos a」だ。もちろん……と喋っているのか、社団法人日本バーテンダー協会の加盟店だ。

わたしはこのお店を紹介してもらったまで、日本バーテンダー協会（NIPPON BARTENDERS ASSOCIATION）略してN・B・A・）なるものがあることすら知らなかった。それどころかバーテンダーの「認定資格」があることも知らなかった。「日本では、とくに資格がなくても働けるんですけど、就職時にはやはり有利ですよ。実力の証明書みたいなものですから」

一応僕も持っていますよと、三井倉さんは微笑して付け足した。彼が有しているNBA認定の証書は二つ。バーテンダー資格証書とバーテンダー技能検定合格証書。

「IBA認定のインターナショナル・バーテンダー資格証書も取りたいんですが、これはまだ先になりますね。経験年数が足りないこともあるけれど、何より技術的にも知識的にもまだ足りてないところが多いから」

技能検定の合格証書をとったのは、去年のことだという。年に一回の試験だそうで、一昨年は不合格だったらしい。カクテルバー「Mimos a」の雇われバーテンダーの彼は、まだまだ勉強中の身だと、自らを語る。

わたしは「すごいですね」と心から感嘆したものだ。明確な未来設計をもって、そのために頑張っている彼は本当にすごいと思う。平凡な生活の上に胡坐をかいて、積極的に行動を起こさないわたしとは雲泥の差だ。比べることすら申し訳ない。

彼は尊敬に値する人物だ。

尊敬している分だけ、……遠い。

三井倉さんとの距離をしみじみと感じていた。

やにわに、彼が訊いてきた。

「その指輪の石は、もしかしてアメジストですか？」

本日二杯目のダイキリ、フローズンではなく、ごく普通のダイキリを注文し終えた時のことだ。

問われて、一瞬戸惑ったけれど、わたしは左手を軽くあげ、「あたりです」と答えた。

「よく分かりましたね。こんなに小さいのに」

左手の小指にはめられているピンキーリングは、天然石の専門シヨップで今日買ったばかりのものだ。シルバーのリングに台座なしで嵌め込まれている、小さなアメジスト。石も小さいけれど、リングも細いし、第一ピンキーリングだから、彼は気付かないだろうと思っていた。

「ええ、まあ……」

彼は曖昧に笑って、躊躇いがちに質問を重ねてきた。

「その指輪はもしや、贈り物？」

「え？」

彼が、こういうプライベートな質問をするのは珍しい。それでちよっと戸惑ってしまった。

彼の唐突な質問に鼓動が素直すぎるほどに、高鳴った。

なんだかそれが口惜しくて……気恥ずかしくて、らしくなく勿体ぶって答えた。

「そうね、贈り物と言えば、そうかも」

「……そうですか」

シェーカーのボディーに氷を入れようとしていた、彼の手が止まった。

わたしは小首をかしげ、すぐに次の句を継いだ。

「自分からの、ね。前から欲しくて探していたの、アメジストのピンキーリング。それで今日、偶然、好みのデザインのものを見つけ、即、買ったちゃったってわけなの」

「ああ、じゃあそれが、良いことだったというわけですね？」

「あ、そうね。そういえば。うーん、でもやっぱり今日の一番良いことは、おいしいフローズン・ダイキリを飲めたこと。あんなにお

いいいフローズン・ダイキリは本当に久しぶりだったから」

「上手ですね」

「本心なんだけどな。それはともかく、ピンキーリングは、そりゃあ見つけられてラッキーだったけど、自分で自分に贈り物っていうか、ご褒美って、今日なんかは少し微妙な気分だから、良いことっていうにはちよっと、……ね」

わたしは肩を竦めて苦笑した。

そう、だって今日は二月十四日。

バレンタインデーだ。

バレンタインデーそのものは、嫌いなイベントじゃない。かといって、乗り気になれるイベントでもなかった。

今日も、とくにチョコレートあげた人はいない。

会社で義理チョコを配っている人もいたし、友達同士でお菓子を交換してる子達もいた。だからといって、自分もそれに倣ってチョコレートを上司達に配りまくろうなんて気には全然なれなかった。これは学生の頃から変わらない。……「本命チョコ」ならあげたことはあるけれど、それはもう随分と前の話だ。

わたしはちらりと三井倉さんを見やった。

用意してくればよかったかなと、心の隅で思わないでもない。

だけど客から贈られるチョコなんて、そんなに嬉しいものじゃないだろう。なにより、わたしが嫌だ。 「義理チョコ」に思われちゃうのは。

「アメジストは」

カウンターの向こう、彼はわたしのためにカクテルを作ってくれようとしていた。グラスを用意するために一度その場から離れたけれど、すぐに戻ってきた。

用意されたカクテルグラスは、わたしが座っている位置からは、並べられた様々な種類の瓶や新鮮なフルーツの盛られた藤籠などに隠されて、ちよつど見えない。

彼が、わたしを見つめて言った。

「アメジストは、二月の誕生石でしたね？」

「ええ。よく知ってますね。そういうことにも詳しいんですか？」

「さあ、詳しいというほどでもありませんが」

話を一旦止め、彼はシェーカーを振る。そしていつも通り慣れた手つきで、グラスにシェーカーされたカクテルを注ぐ。

「アメジストの名の由来は、ギリシア語でしたね。酒に酔わない、という」

「へえ……。それは知らなかったな。やっぱり三井倉さん、詳しいですね」

「まあ、それなりです」

彼は、わたしの前にカクテルグラスを置く。ダイキリは、無色透明のカクテルだ。グラスも同様に、なんの色も柄もない、透明のカクテルグラス。

「……あ、の……、これ、は」

カクテルグラスの中、いつもなら入っていない物が沈んでいた。

……氷ではない。フルーツでもない。照明の光を受け、控えめな輝きを見せている、紫色のそれ。

「そうしてアメジストを入れておくと、酒に酔わないといえますよ」  
「で、でも……っ」

カクテルグラスに沈んでいるのは、アメジストではあるけれど、それ以前に……

戸惑うわたしに、彼がとびきり優しい笑顔を見せて言った。

「誕生日おめでとう、晶枝さん」

「……………」

わたしは絶句していた。……どうして知っているのかと訊くこともできない。みるみるうちに頬が熱っていくのが、自分でもわかる。まるで、初な少女にもどったようだ。胸がどきどきと高鳴っている。  
「今日、誕生日だったよね？ 前に一度、バレンタインデーが誕生日なんて、なんか微妙な日に生まれちゃったなあってこぼしたの、

憶えてない？」

彼は急に口調を変えてきた。それは、バーテンダーではない、素のままの三井倉さんの口調なのだろうか。

「よ、よく、憶えてましたね……」

「うん。気になる人のことだから、気に留めてた」

「……今、なんて……？」

「誕生日だし、ついでに言えばバレンタインデーだから、その機に乗じてみようと思って。だからチョコレートも用意してみた。ああ、義理じゃないよ。本命だから」

彼が特別にと言っ出て出してくれた、生チョコ。それを見てまた絶句した。

「……………」

我ながらなんて鈍いんだろうと焦ったけれど、気付かなくたってしょうがない。だって、こんなの想定外だもの……！

わたしは動揺しきって、出されたダイキリを飲む余裕もない。けれど彼は優しく微笑んで、「冷たいうちにどうぞ」と促してくれた。

わたしはぎこちなく頷いて、冷えたダイキリを一口、口に含む。

口の中で、フレッシュライムの爽やかな香りが広がった。嚙下すると、それがきっかけとなって胸が開いていく。

カクテルグラスを持つ手が震えていないのが不思議なくらい、どぎまぎしている。三井倉さんのまっすぐなまなざしを受けているのが恥ずかしい。

俯いて、そしてグラスの中、ダイキリに浸されているアメジストの指輪を見つめた。

その後、「要らないなら、そのままグラスに入れておいて」と言った彼に、わたしはとんでもないとばかりに首を横に振って応え、それがそのまま、彼の気持ちの応えになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1271z/>

---

A collection of short stories

2011年12月4日17時54分発行